

創刊特別号

April / 2017

春

VOL. 1

JTI Members Magazine

すみつぐ



特集① 巻頭対談「明日の住まいを考える」

残間里江子さん

新しい時代の新しい幸せを
JTI がサポートします

特集② 住みかえファイル

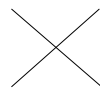
- 「マイホーム借上げ制度」利用者様に聞く -

夢のパン工房

夫婦で挑む第二の人生

残間 里江子

プロデューサー



大垣 尚司

JTI 代表理事

巻頭対談『明日の住まいを考える』、記念すべき第一回のゲストは残間里江子さん。旧知の仲のお二人は、ラジオ「大人ファンクラブ」でも長年パーソナリティとしてタッグを組んでいます。友人として、ときには姉と弟(!?)として。2017年、JTIの展望についてお話いただきました。

part1 変化する社会に、住宅マーケットはどう応えるか

残間 大垣さんとはもう10年以上の付き合いになるわけですが、まさかあのときお話ししていたJTIがこんなに広がりを見せるとは思ってもみませんでした。「買った家を貸しに出すだけで、その後は空き家になっても家賃が支払われる」なんて初めて説明されたときは、仕組みも理屈も分からなくて、夢物語のように感じました。

そもそも、JTIの仕組みを考えだしたきっかけというのは何だったのですか？

大垣 少子高齢化によって社会や人々の暮らしが大きな変化を迫られているので、住宅のマーケットもそれに対応して大きく変わる必要があるということでしょうか。

残間 社会の変化、といえますと。

大垣 たとえば、2000年頃に、経済政策の一環として、これまで25年だった住宅ローンの期間が、35年に延びました。この結果、ローンの月返済額が大きく減って住宅が買いやすくなって景気を下支えしたわけですが、一方で、多くの借主が定年後も長期間ローンの返済を抱えることになっています。そうした借主の大半はまだ50代ですから、その影響が出るのは先ですが、大丈夫なのか、一抹の不安があります。

それから、住む場所の考え方についても変化が出てきています。家を買ったはいけれど、子供が独立した後の子供部屋は物置状態なのにダンナの部屋はもとよりない。退職したら通勤至便な家に固執する必要はない。少子化が進む地方からは必ず住みか

えを支援する動きも出てくるはずだ。果たして本当に「死ぬまで買った家に住む」という選択肢だけがいいのか、何か新しい家との付き合い方を提示できるんじゃないかと思っただけです。


残間 介護で実家に帰らざるを得なくなることもあるでしょうし、地震もいつ起こるか分からないし、何が起きてても一生同じ家に住み続けると断言できる人のほうがむしろ少ないのかもしれない。年をとると広い家の掃除も大変ですしね。

でも、それなら賃貸の家にならずに住み続けてもいいのではないですか？

大垣 そこも問題なんです。実は日本の賃貸住宅って「地主さんが効率よく儲けられるように」という目的で建てられたものが多いんです。このため、同じ広さの土地からできるだけたくさん部屋が作れるワンルームか2DKまでのアパートばかりになってしまう。

残間 子育てするにはちよつと手狭ですね。となると、子供を産んだら家を買うという方向に行く人は多いですね。で、買ったが最後、定年を過ぎても延々払い続けられないじゃないかということになるわけですね。

大垣 はい。狭い借家と広いが不安な持ち家の間を埋める仕組みが何かあってもいいんじゃないかと。私は最初「買った持ち家を住みかえるときに売れば確実にローンが返せる仕組みがあればいいのではないかと考えたんです。でも、中古の家は、まだまだ住めても二束三文でしか評価されないという現実があり、売値が土地の価格に大きく影響されてしまい、地域差が大きすぎ



新しい幸せをサポートします



新しい時代の JTIが

るんですね。

残間 住んできた家を売ってしまうということに対して、抵抗もありますしね。

大垣 そこで少し視点を変えて家賃を調べてみると、予想に反して地価とほとんど連動しておらず、時代や地域にあまり関係なく安定している。そこで、家を売るとき値段ではなくて、何年賃貸に出せるかという家賃から逆算した価値でみるのができれば、首都圏や大都市でなくても相応の値段が付けられることに気がきました。

残間 結果として新しい価値軸をつくったわけですね。私の仕事も「新しい価値観の創造」が主軸ですが、制度新設を絡めつつ人々の発想を転換させるって大事なことだ

と思います。

大垣 これなら日本全国でやれるので国に支援をお願いしても不公平にならない、ということ、国費のプロジェクトに応募したところ、家賃保証のための基金を設定してもらえらることになり、JTIをつくりました。

残間 そこから今に至るわけですね。2016年で、制度の利用者は延べで1000件を超えたとか。

大垣 そうですね。初期の利用者の方の中には、もう支払った家賃が総額で1000万を超えた方も10名以上いらっしゃいますよ。

part2 20年先まで見通すバンカーでありたい

残間 大垣さん、昔と比べると人当たりが柔らかくなりましたよね。

大垣 そうですかね。

残間 前はもつと怖くて、見るからに天才肌。あまりに先の先まで見通して、数字については明るすぎるから、下手なことを言うとも身も蓋もなかった。

大垣 天才かどうかはともかく、実も蓋もないのは今もそうですよ。

残間 うーん。今もそういうところもないではないけど……(笑)。付き合っていくうちに、大垣さんは常にみんなのことを考

えている人だと分かってきて、「我欲」が全くない。自分からは「みんなのことを考えている」とは言いたくない人だということも分かってきました。私は大垣さんを知って「金融マン」のイメージが変わりましたよ。金融っていうのは、何となくいかかわしくて、そばに寄っちゃいけないものという感覚があったのです。

大垣 そういう「金融」のイメージはある意味正しいですよ。

金融っていうのはいつも「リスクを取らずに儲けること」を考えます。ただし、そのやり方には2種類あるんですね。一つ目は、残間さんが今おっしゃったような金融ですね。本来の値段より安いものを買って、高いものを売ることで、短期的な儲けを得

るタイプ。たとえば、「この会社の株は本当はもつと高くてよいのに」と思えば買いう。予想が正しければしばらくすれば値段が上がるはずなので、その時点で売り抜ける。予想が正しいなら割安なものを買って

いるだけなのでリスクはとっていません。それからもう一つは、10年、20年という長期的なスパンで考える金融です。これが僕のやりたい「金融」なんですけれども。社会の変化を予測して、その変化に対応す

JTIがこんな広がりを見せるとは思ってもみませんでした。(残間)

何か新しい家との付き合い方を提示できるんじゃないかと思っただんです。(大垣)



おおがき・ひさし

JTI 代表理事・青山学院大学教授 / 1959 年京都生まれ。2006 年に「有限責任中間法人移住・住みかえ支援機構」（現、一般社団法人 移住・住みかえ支援機構）の代表理事に就任。日本モーゲージバンカー協議会代表理事、金融審議会専門委員、独立行政法人住宅金融支援機構評価委員等を兼務。著書に『ストラクチャードファイナンス入門』『金融と法』『49 歳からのお金・住宅・保険をキャッシュに換える』『建築女子が聞く 住まいの金融と税制』など。

経済成長で培った「資産としての家」を使って、すべての世代が理想の生活を送るためのサポートをしたい。（大垣）

る上で必要なお金に関する制度や仕組みを
用意する。そうすると、その仕組み自体が
変化を促して制度の利用が進む。この場合
は、「ここに行くはずだ」という予想さえ
正しければ、少しずつですけれども長期間
にわたって確実に儲けることができるわけ
です。

このやり方の場合、「儲けるためには人々
のためになるようなことをせざるをえな
い」という感じになります。

残間 そういう考え方って、金融をやっ
ている人の中では常識的なのですか。

大垣 うーん。そうでもない。「金融を仕
事にしていて」と言う人のほとんどは、短

期の金融をやっていますね。お金もこちら
のほうがずっと儲かりますから。

ただ、歴史的に見て尊敬される「バン
カー」と呼ばれるような人は、絶対に後者
の「金融」をやってきた人なんです。

残間 大垣さん、最初に勤めたのは確か日
本興業銀行でしたよね。かつて天下国家銀
行とよばれて別格扱いされていた銀行です
よね。

大垣 そうですね。私が興銀で習ったこと
はものごとを長期的に考える金融だったよ
うに思います。「俺たちのやっていること
は、目先の浮き沈みじゃなくて、20 年後
を見据えて必要なところにお金を付けるこ

となんだ」って。そして、それがどうい
うことなのかを考えないと、いい興銀マンに
はなれない、みたいな雰囲気があったんで
す。

残間 興銀時代があったからこそ、JTI
が生まれたのですね。以前「金融をやっ
ている人が最後に辿り着くのは住宅ロー
ンだ」ということをおっしゃっていました
が、興銀時代から、いつかは住宅ローンを
やりたいと思っていたのですか？

大垣 どうでしょうね。面白いと思うこ
とをやってきたら、いつの間にかここにき
ていたという感じでしょうか。興銀では
「証券化」とよば
れる先端の金融
技術を日本に導
入する仕事をし
ていたのですが、
JTI の制度は

そうした先端技術を応用しています。

興銀のあと役員をさせてもらったアクサ
生命では少子高齢化の問題や、家計のファ
イナンスについて深く考えることになりま
した。そして、住宅金融公庫が証券化の仕
組みを活用して住宅金融支援機構に衣替え
をするのを手伝いました。そのご縁で、住
宅メーカーのご支援を得てモーゲージバン
クという新しい金融機関を立ち上げたので
すが、そこでは、住宅や住宅金融のことを
より深く知ることができました。

残間 そのときそのとき誠心誠意やってき
たことが、JTI という形で実を結んだ
のですね。



part3 2017年
JTIは新たな一歩を踏み
出します

残間 今年、JTIは10年目、節目の年
ですね。新たなスタートの年だと伺いまし
た。

大垣 そうですね。これまでの10年で仕組
みそのものは安定してきましたが、この
間住宅や住宅金融のあり方を変えなければ
ならないという切迫感は日に日に大きく
なっています。

一方、地方創生の動きも活発化してきま

した。そんな中、アパートしかない賃貸住
宅業界の仕事の仕方では、制度を利用する
方々の満足を十分に得られないということ
も分かってきました。

そこで、2017年は、単に家を借り
上げて転貸する公的な仕組みとすること
ではなく、「マイホームを次の世代に循環さ
せる」全く新しい仕組みに変えていくため
の新たな第一歩を踏み出す年と位置づける
ことにしました。

冒頭でもお話ししましたが、少子高齢化
がどんどん進む中、経済は成熟段階に達し
ており、大きな成長は見込めません。これ
までのように経済が成長していれば幸せ、

という考えではうまくいかなくなってくる。

今JTIがやっていることは、次の時
代の「幸せ」に向けて、経済成長で培った
資産：つまり家を、上手に使っていいこ
うじゃないか、ということですね。いい状態
の家はたくさんあるわけですが、多くの人は、
それを建てっぱなしにして、結局空き家に
して腐らせていく。

それをお金に変える仕組みを提供し、ま
た、これから家を買う人にはそういう仕組
みがある前提で人生設計を考えてもらえれ
ばということですね。

残間 豪華絢爛なものや高価なものを求め
てお金を使うのが幸せ、という時代では確
実になくなつて

社会に生きるみんなが「自分にとっての幸せ」を考え ないといけない時代にさしかかっているのですね。(残間)

きていますよね。
みんなが「自
分にとっての幸
せは何なのか」
を考えないとい

けない。でもまた、そう考えるのが当たり
前という段階まではきていませんよね。大
垣さんがおっしゃるように、周知が必要な
時期なのでしょうね。

大垣 たとえば、この間残間さんとラジオ
の収録をしたときに、都会から田舎に引
越して、80代でもバイクで走り回っている
おじいちゃんを紹介しましたよね。ああい
う方って、やっぱり好きなことをしている
から健康なんだろうな、と思うんです。介
護という言葉とは縁遠そうでしたよね。

別に田舎で暮らせ、と言っているわけ
じゃないですよ。みんなそれぞれに「幸せ」

の形はあると思います。

ただ、どんな形であれその実現にはお金
が必要です。そのとき、「それならこうい
うサポートができますよ」と下支えをする
仕組みを考えるのが私の役割だと思ってい
るんです。

残間 人間の数だけ価値観があっても、お
金の問題は一つ、ということですね。そう
か、大垣さんが言っているのはそういうこ
となのですね。「なんだかんだ言ってもお
金ですよ」っていう表現は、一見すごく
冷たいなと感じますが、そうではなくて、
「だから、そのお金をどうやって使って
いくか考えましようよ」と。すごくポジテ
ィブなのですね。

ラジオ番組の反響をみていると、JTI
の制度利用者は今後どんどん増えていくと
思います。

大垣 そうあって欲しいですね。そこまで
きたら、私はまた違うものをつくってどっ
かいつちゃうかも。0から1を創るのが
楽しいので。また新しい制度を考えつく
か、そうじゃなければ幼稚園をつくりたい
(笑)。

残間 それ、いいかもしれません。何しろ
大垣さんは幼い子供が大好きだし、私は子
供たちが驚くほど大垣さんになつている
というシーンを目撃したことがありますか
ら、最後幼稚園の園長先生というのは素敵
だと思えます(笑)。

大垣 ありがとうございます。



ざんま・りえこ

プロデューサー / 1950年仙台市生まれ。アナウンサー、編集者を経て、80年に企画制作会社「キャンディッド・コミュニケーションズ」設立。出版、映像、文化イベント等を多数企画・開催。07年にユニバーサル技能五輪国際大会の総合プロデューサーを務め、成功に導いた。09年には、既存の「シニア」のイメージを払拭した新しい「日本の大人像」の創造を目指し、会員制ネットワーク「クラブ・ウィルビー」を主宰。著書に『閉じる幸せ』(岩波書店)など。

夢のパン工房 夫婦で挑む第二の人生

今回、インタビューに応じてくださったのは、諫早隆通さん（64歳）、優子さん（59歳）夫妻。二人はJTIの制度を利用して、千葉県から福島県二本松市の優子さんの生家へ移住。現在、同地でパン屋を営んでいる。パン屋の開業から1年半、これまでの経緯とこれからの夢を聞いた。

「智恵子」のパン屋

二人が経営するのは「山麓ふもとのパン屋 いったさ」。開業したのは2015年4月。現在は、優子さんが有機栽培のライ麦を使ったドイツパンと国産小麦粉を使用した菓子パンを工房で手づくりし、隆通さんが「道の駅 つちゆ」を中心に土日祝日限定で販売している。

ライ麦パンの製造には時間がかかる。木曜日から自家製酵母を使って発酵などの仕込みを行い、金曜も数度の発酵を繰り返した後、夕方からようやく焼き上げ作業となる。ライ麦パンが冷えるのを待ち、土曜日は午前3時に起きて、ライ麦パンをカット。それから、前日に仕込んだ菓子パンを焼き上げる。一方、隆通さんが出来上がったパンを袋詰めし、ラベルを貼って商品となったものを車に積み込むのが午前9時。「道の駅 つちゆ」の一角に机を出し、午前10時から午後4時頃まで1人で販売を行う。



制度利用者様インタビュー
住みかえファイル vol.1

移住を決定づけたのは優子さんの郷愁とパン作りへの情熱だった。

優子さんは、高村光太郎の詩集『智恵子抄』をよく思い出すという。その一篇に「あどけない話」がある。『智恵子は東京に空が無いといふ。ほんとの空が見たいといふ。(中略)阿多多羅山の山の上に 毎日出ている青い空が 智恵子のほんとの空だといふ』。優子さんが生まれ育つたのは、まさにその阿多多羅山(安達太良山)の麓だ。

今から6、7年ほど前、高速道路が千円サービスを行っていた時期のこと、度々週末に里帰りする中で、この地でパン屋をやりたいという思いが芽生え、日増しに強くなっていった。「智恵子の気持ちに通じるというか、都会で暮らしていると、こういうところがいいと思うようになってるんですね。ここでパン屋をやれたら素敵だろうなって……」

高校卒業と同時に東京で就職。そこで出会った隆通さんと結婚し、二人の子どもを授かった。以来40年、ずっと都会で暮らしてきた。

4年前、下の子どもが就職したのを機に、優子さんはついに隆通さんに温めていた想いを切り出した。

「二本松でパン屋をやってみたいんだけど」



高校卒業以来、ずっと都会で暮らしてきました。でも、故郷の安達太良山の麓でパン屋をやりたいとずっと思ってたんです。(優子さん)

妻の熱意に押されて

「最初は、妻の言葉を真剣には考えてなかったんですよ。だってパン屋で働いた経験もないのだから」と当時を振り返る隆通さんに対し、優子さんの口調が熱をおびた。「確かにそうだけど、とにかくパン作りが好きだったのよね」。20年程前に友人からパン作りを教わったのを契機に、千葉の自宅にはガスオーブンまで入れてパンを焼いてきたのだ。

「どうせ実現しないだろう」という隆通さんの予想とは裏腹に、優子さんは動き出した。思いを切り出してから一年後の13年3月、15年以上働いた職場を退職。同僚の「本当にやるの?」という心配をよそに、雑誌で見つけた長野県松本市のライ麦パン専門店まで2か月間修行に行った。

「それで本気だということが分かった」と隆通さん。優子さんが松本から一時帰省した際、二人で話し合い、JTIに登録した。

14年の年明けとともに生家の一部をパン工房にかえる改修工事を行い、その年の8月、逸る気持ちをおさえきれず、優

子さんは単身、二本松へ移住した。

「でも、主人が本当に来てくれるのか不安でした」

東京で生まれ育ち、一級建築士として大手企業で働く隆通さんが、見渡す限り山しか見えない土地に移り住み、しかもパン屋をやつてくれるのだろうか。

しかし、自身の退職金をほとんど全てつぎ込んでまでパン工房を作った優子さんの姿に隆通さんも決意を固めていた。

「そこまでやるんだったら自分も力になるうっていう気になったんですよ。それに、このままサラリーマンを続けて、昔の仲間との飲み会やゴルフに行くよりも、こっちの方がいいかなっていう気にもなりましたね」

隆通さんは62歳で退職し、その翌年、二本松に向かった。

さらなる夢

パン屋の開業から隆通さんが来るまでの半年間、優子さんは製造から販売までを一人で行っていた。近くの保養施設や「道の駅つちゆ」で売っていたが、なかなか販売は振るわなかった。それに、午

妻の熱意に、私も力になろうと思いました。でも、

実はまだ完全に移住という頭にはなってないんです。

だから、JTIさんが良かったんですよ。(隆通さん)



1. 焼きあがった天然酵母パン。2. 「山麓のパン屋いっさ」案内カード。3. 早朝から工房での仕込み作業。4. 荷台へ積み込む。

Information



ふもと 山麓のパン屋いっさ

販売所：道の駅 つちゆ

「つちゆロードパーク」

営業日：3~11月 毎週土・日・祝日

(※GWと紅葉シーズンは平日も営業)

営業時間：午前10時~午後4時頃

住所：福島市松川町水原字南沢 41-2

URL：<http://www.thr.mlit.go.jp/road/koutsu/Michi-no-Eki/fukusima/fu01.html>

アクセス：東北自動車道、福島西ICより国道115号線を猪苗代方面へ約35分 / 東北本線 JR二本松駅より車で約25分

(2017年4月現在)

前3時からの仕込みに始まり、午後4時までの販売は、体力的にも厳しい。そこで、移住後は隆通さんが販売、優子さんは製造に打ち込むことにした。

隆通さんは対面販売を通して、硬く多少値も張るライ麦パンは保養施設には向かないことに気づくと、「道の駅 つちゆ」を販売先に絞った。土湯温泉、福島市、裏磐梯、猪苗代を結ぶ交通の要衝にあり、特にゴールデンウィークや紅葉の時期には数多くの観光客で賑わう場所だ。「観光客の中には、きっとライ麦パンの購買層がいるはずだと思っていました」。狙いは当たった。素材と防腐剤を一切使わない、製法へのこだわりが評判を呼び、リピーターも増えてきた。

「今後は、ネット販売や注文販売にも力を入れて、自然食品のお店に卸したり、

無理のない形で販路を拡大していきたいですね」と隆通さんが次の目標を語ると、「自家製のライ麦作りも始めたんですよ。いずれは、このライ麦を使いたいと考えています」と優子さんはより良い素材の追求を語った。

二人にはさらなる夢がある。工房にショップを併設することだ。まるで「智恵子」のように無邪気に、優子さんは照れながら言った。「ここで販売もしたいです。それと、これは本当に夢のまた夢ですけど、カフェもできたらなって思ってるんです」

安達太良山の麓、木々に覆われたカフェ、そんな場所で味わう自然いっぱいのライ麦パンは格別だろう。二人の夢が実現する日もそう遠くはないかもしれない。





右上から陽子さん、森之介君、三男・秋律君、正弘さん、春以ちゃん、二男・架君

大きな家が、
子育てに
役立っています。

今回インタビューしたのは、東京都東村山市の物件に入居して7年になる濱村正弘さん一家。入居時に2歳だった長女の春以ちゃんは小学生になり、長男の森之介君はこの春から高校生。入居後、さらに二人の子宝に恵まれ、現在は子ども4人の大所帯。

「もともと、大家族を計画していた訳ではないんですけど、大きな居住スペースがあるから可能だったんです。うるさいと思うこともありますが(笑)、毎日賑やかで楽しいです」(正弘さん)

大きな庭には子どもたちのためにブランコを設置し、床がカーペットの部屋も自分たちの好みに合せてフローリングに張り替えたりと、この家への愛着も増しているそうです。

マイホームを

定期預金に

換算してみると・・・

マイホーム借上げ制度の家賃は国の基金で保証がなされている上に、空き家でも最低保証家賃が支払われます。終身型なら3年毎に制度を終了させて家を返してもらうことができます。

これって、ちょうど3年の定期預金を預けて毎月金利をもらっているのと似ていますよね。そこでたとえば、月の手取り家賃が5万円、7万円、9万円の3つの例で、もし同じだけの利子をもらうためにはどのぐらいの金額の預金を預ける必要があるか考えてみましょう。

現在、定期預金の利率はほ

とんどの銀行で0.01%です。

これじゃあまりに低いので期間限定のキャンペーン金利を探すと0.2%というのがありました。まず、金利が0.01%だと、月に5、7、9万円の利子をもたらうのに必要な預金額は、それぞれ60億円、84億円、108億円!! 0.2%なら、3億円、4億2千万円、5億4千万円です!

中古住宅は売ると二束三文などと言われますが、貸せば、数億円の定期預金と同じ収益を生む庶民にとって最大の資産なのです。

(大垣尚司)

コラム：ちょっと気になるすまいとお金のはなし

茨城県では県外にお住まいの方に、茨城への愛着や移住への関心を持っていただこうと「いばらきふるさと県民登録制度」を実施しています。茨城県外にお住まいの方ならどなたでも無料で登録ができ、「ふるさと県民」になると、茨城県内の協賛施設や店舗、東京・銀座のアンテナショップ「茨城マルシェ」での優待・割引、メールマガジンや季刊誌「タライバマガジン」による茨城情報のお届けなど、様々な特典が受けられます。※特典等の詳しい内容はポータルサイト「茨城移住ナビ」をご覧ください。



「いばらきふるさと県民登録制度」(茨城県)

お問い合わせ

いばらき暮らしサポートセンター (ふるさと回帰支援センター内)
住所：東京都千代田区有楽町 2-10-1 東京交通会館 8F
Tel: 080-9552-5333(※相談員直通携帯電話)
Mail: ibaraki@furusatokaiki.net

いばらき移住・就職相談センター (茨城県東京事務所内)
住所：東京都千代田区平河町 2-6-3 都道府県会館 9F
Tel: 03-5212-9088

常陽銀行 上野ローンプラザ (「ゆとりライフ」についてのご質問)
住所：東京都台東区東上野 3-18-4 上野支店内
Tel: 03-3837-0711

さらに、JTI・常陽銀行との連携により、移住する際の経済的な負担を軽減する新しい住宅ローン「ゆとりライフ」を提案しています。常陽銀行の上野ローンプラザでは専用の窓口を設置していますので、お気軽にご相談いただけます。

また、茨城県では都内移住相談窓口を、有楽町のふるさと回帰支援センター内と平河町の茨城県東京事務所内に開設しておりますので、どうぞお気軽に足をお運びください。まずは、「ふるさと県民」になって、実際に茨城にお出でいただき、茨城での暮らしをイメージしてみたいかがでしょうか。皆様のお越しをお待ちしております。

編集部より

『すみつぐ』編集部では、制度利用者様からのお便りをお待ちしております。住みかえや住まいに関する疑問、アドバイス、つれづれ思うことなど思いやお気持ちをお聞かせください。今回お送りした『すみつぐ』へのご意見もお待ちしております。

例えばこんな疑問や体験

▷「住まい」についてこんなことが知りたい(リフォームや耐震補強についてなど)▷「住みかえ」についてこんな情報が欲しい(各自治体の移住情報、気になっている地域など)▷住みかえレポート(住みかえて良かったこと、苦労したこと、びっくりしたことなど)▷JTIへのご質問、ご要望。▷『すみつぐ』各コーナーについてのご意見、ご感想。

読者プレゼント

お便りを送ってくださった方、創刊号に同封されているアンケートにお答えくださった方の中から抽選で3名様にJTI代表理事大垣尚司著『49歳からのお金ー住宅・保険をキャッシュに換えるー』(日本経済新聞出版社)をプレゼント!

引退後の生活を、無理なく過ごすための防衛策を分かりやすく説明した一冊です。

【応募締切日】2017年5月10日 JTI着



すみつぐ編集部へのお便りお待ちしております!

3名様

※当選発表は商品の発送をもって替えさせていただきます。商品のお届けは日本国内、契約者ご本人様の弊社へご登録いただいているご住所に限らせていただきます。

宛先はこちら

必要事項(①~④)をご記入の上ハガキ、FAX、メールのいずれかにて下記宛先までお送りください。

①郵便番号、ご住所 ②お名前 ③ペンネーム(あれば) ④今号へのご意見、ご感想など

宛先 : 102-0093 東京都千代田区平河町 1-7-20-5F
JTI「すみつぐ」編集部

FAX : 03-5211-3207
E-mail : sumitugu@jt-i.jp

すみつぐ
創刊特別号

発行日：2017年4月1日

発行：一般社団法人移住・住みかえ支援機構（JTI）



〒102-0093

東京都千代田区平河町1-7-20
平河町辻田ビル5F